

## | 巻頭言 |

# 教師と学生

別府大学  
学長 豊田 寛三

45年、「教師」という生活を送っていると、いろいろな出会いがある。40年前に、妻と生後2カ月の長男と一緒に着任した私たちを迎えてくれたのは、今も変わらない「別府の湯けむり」だった。が、この年は、通常ではなかった。前年からの石油ショックや狂乱物価の中で、全国的に労働運動が盛り上がり、当時の国鉄は「順法闘争」「ゼネスト」を行い、3日間の全国の国鉄・私鉄が運行停止で、レールには赤さびが浮いていた。

「すべて転んで…」しか知らず、知人もほとんどなく、新学期を迎えた。同僚といっても、定年前1年の大先生だけであり、心細い日々だった。4科目担当する授業といってもどういう内容かもわからず、手探り状況であったが、自分のこれまで研究してきたこと、今後やりたいことを「学説史」に基づきながら話すこととした。今、考えてみると、学生諸君にとっては大変な迷惑だったと思う。今、新任の先生に、FDが必要だと思うのは、自分の苦い体験によるといえよう。

4月の終わりに卒論学生の配当があり、男子学生2名（T君とU君）と面談した。それまで、自分のやってきたことや、何がやりたいか？について語り合った。ふたりは、自分の育った地域の江戸時代の歴史を勉強したい、とのことであった。しかし、当方も大分県地域の近世史に関する知識は『大分県の歴史』（山川出版、旧版）の記述程度で心もとないものだった。地域に残る資料の確認のために、3人であちらこちら探し回った。T君は、熊本出身であり、帰る暇がないとのことで、大分のものを使用することとした。二人には、なるべくオリジナル史料



を使ってもらいたい、と思っていた。当時は、現在のように資料が閲覧できる公共施設はほとんどなく、専門の職員1名（Aさん）の県立図書館郷土資料室があるのみだった。

Aさんに、旧庄屋家や資料の所在等について教えていただいて、S町のO家を訪れた。O家の記録類のなかに、中世文書があることに、まず驚いた。ほかにK村の検地帳があった。この帳面には、江戸時代の村内の田畑屋敷一筆ごとに所有者が記されていた。これだけなら、普通の検地帳である。この村のものには、江戸時代の17世紀半ばから19世紀始めまでの5期のそれぞれの所有者が記されていた。その作成の意図は不明であったが、1冊の検地帳から近世期の土地移動が理解できるという非常に珍しいものである。T君には、この帳面を使って村内の土地所有の変化を追跡してみないか、と話すとは是非やりたいとのことであり、O家の主要な史料を写真に撮り、プリントした（勿論自分で）。

U君は中津の出身で、近所に旧庄屋家（I家）があるとのことだった。また、3人で出かけた。I家の文書には、I村の中津藩文化一揆の要求書や行動記録があった。豊後・豊前の文化一揆については、ある程度承知していたが、I家の記録は学界未紹介であった。また、近村のN家にも文化一揆関係の史料があり、U君も大いに関心を示したので中津藩文化一揆に決まった。I家・N家の文書も写真撮影し、プリントした。

それから、3人の勉強会が始まった。週に1回は、彼らと文書演習を行い、その意味について勉強した。当初は全く文書も読めなかった二人だが、教員採用試験が終わり、本格的に卒論演習に取り組んだ二人は、急速に成長し、立派な卒論を作成した。否、自分の方が成長させてもらったかも知れない。「師弟同学」ということを身をもって感じた。当時は、大分や熊本の教員採用試験は大変むつかし

く、T君は横浜市教員になり、途中、指導主事やプサンの日本人学校の校長なども勤め、今年の春校長で退職したとの報せをもらった。U君はどうしても大分県に就職したいという事で、1年研究生をし、卒論の一部を活字にした後、正採用され、昨年の春、やはり校長で退職した。金も知識も人的関係もなかった新米教員だった自分が、定年まで勤められたのは、彼らとの「学び」のスタートがあったからだと思っている。

3年生以下の学生諸君の授業も、講義ノートができるのは授業直前、という綱渡りではあったが、何とかしのいできた。但し、これまでの教師生活で、自分で「うまくいった」と思った授業（1コマ）はほとんどない。これは、学生諸君に申し訳ないという気持ちが今も続いている。当時は、年齢が近かったからか、大分に不案内の私達は多くの学生諸君からさまざまなことを教えてもらい、遊んでももらった。授業外にも共に高めあうために読書会・研究会などを行い、県内外の研修旅行などにも行った。

昨年の春、ある市の部長さんに会った。名刺を交換して、珍しい姓だったので、「昔、私の学生に〇〇さんという人がいましたが…」というと、「それは、姉です。先生のことは姉からよく聞いております。」といわれた。当時、彼は高校生で、姉と一緒に下宿しており、その後東京の大学に進学した由。姉弟がどんな話をしたかは知らないが、人の縁というものに少し驚いた。

教師と学生・生徒の出会いは、偶然の要素が多い。しかし、教師は与えられた出会いを大切にすること、そして全力を尽くして共に学び、高めあうために努力すること、これだけは教員をめざす皆さんに確信をもって言えることである。

ハードルは高ければ高いほど、飛び越した時の喜びは増すだろう。